CURRICULUM

明治学院共通科目ガイドブック

MEIJI GAKUIN UNIVERSITY

グローバル法学科用

はじめに

DO FOR OTHERS WHAT YOU WANT THEM TO DO FOR YOU.
人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。
（マタイによる福音書７章12節）

“DO FOR OTHERS”（他者への貢献）—本学の建学の理念を表したこの言葉には、二つの大事な事柄が含まれています。一つは、最初の“DO”ということ。行動するということ。この言葉はそのことの重要性をまず私たちに教えてくれます。

もう一つが“OTHERS”。“OTHERS”とは、あなたにとって誰のことか。これは私たちへの問いかけです。“OTHERS”は、あなた自身がその“OTHERS”から何かをしてもらいたいと強く望む、そういう相手のこと。しかし、それが具体的にどこの誰であり、その人たちに何をしてもらいたいとあなたたちは思っているかここには何も書いてありません。それは、あなたが自分で見いださなければなりません。

一つだけはっきりしているのは、あなたが誰かのために何かをしたいと思うとき、彼らがいったい何をあなたにしてもらいたいと望んでいるかは、その人たちの立場に自分を置いてみないとわからないということです。自分だったらこうしてもらいたいとわかったとき、私たちははじめて自分が何をすればいいかがわかる。そして、そのときには、彼らはあなたにとってもう“OTHERS”ではなくなっているにちがいありません。

このガイドブックは、みなさんが大学に入学して最初に身につけるべき、広い意味での「言葉」についてのガイドブックです。自分の知らない世界の人々の生活や文化、地域の諸問題を発見し、行動してゆくためには、わたしたちは相手の「こころ」に届く「言葉」、世界を知るための「言葉」を知る必要があります。

外国語だけでなく、情報科学や経済学で使う数学も、世界を知るための広い意味での「言葉」です。「言葉」のコミュニケーションの根底には、「コミュニオン」（スピリチュアルな交わり共同性、聖餐）の問題があり、これはキリスト教の根幹でもあります。人間の宗教的次元の問題を理解するためには、その宗教をかたちづくっている「言葉」を学ぶことが重要となります。

明治学院共通科目の諸科目群を通して、一緒にこのような“OTHERS”を知るための「言葉」の学びをはじめましょう。

CONTENTS

Ⅰ．はじめに……01

Ⅱ．明治学院共通科目について……03

Ⅲ．諸領域科目について
ⅰ．必修科目「キリスト教の基礎A・B」の履修について……07
ⅱ．必修科目「コンピュータリテラシー」の履修について……13

Ⅳ．必修科目「コンピュータリテラシー」
登録申込について……17

Ⅴ．選択科目の紹介
ⅰ．諸領域科目
・科目群（C/D/E/H/I 群）の紹介／科目一覧……20
・特徴のある科目の紹介
「アカデミックリテラシー研究１」……22
ボランティア市民活動実習プログラム……25
ⅱ．外国語科目
・科目群（C/E/I 群）の紹介／科目一覧……27
・留学プログラムの紹介……29

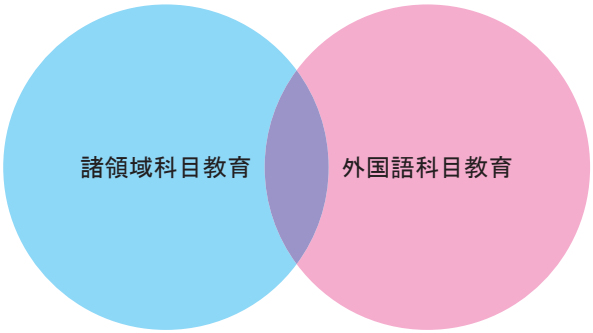
明治学院共通科目について

「明治学院共通科目」(MGU Core Curriculum)について

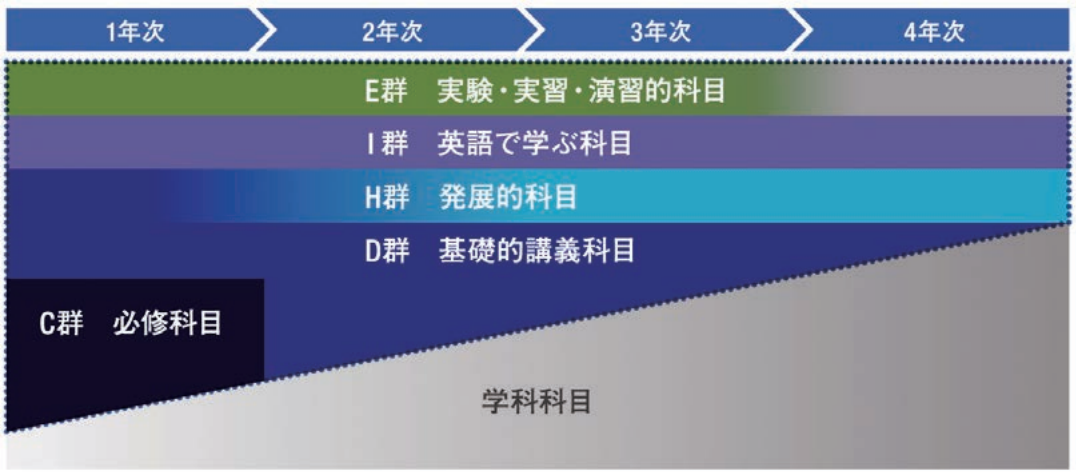
明治学院大学は、自分の専攻とは異なる学問領域についても、4年間かけて深く学ぶことができるチャンスとカリキュラムをみなさんに提供しています。これが「明治学院共通科目」です。異なる学問領域からもう一度世界や身のまわりについて見てみること、考えてみることは、ものの見方や行動にふくらみを持たせ、他者やその文化に対する理解を深めることにもつながります。その力を、明治学院大学の4年間で是非身につけてほしいと心から願っています。

「明治学院共通科目」の理念・目的

「明治学院共通科目」の理念・目的は、キリスト教主義に基づく人格教育という建学精神の下に、他者との共生を目指し、世界に生起する諸問題について柔軟かつ誠実に対処することのできる人材を育成することにあります。その実現のために、「明治学院共通科目」では「外国語科目」と「諸領域科目」の教育が連携して、確かな表現力と思考力を身につけることができるような総合的な教育を推進しています。



「明治学院共通科目」の諸科目は以下のように構成されており（下図、青色点線枠内）、４年間を通じて学び続けることができます。将来の展望や個人の興味関心にしたがって、入学時から卒業までの期間を通じて、「明治学院共通科目」を履修することが望まれます。



外国語科目

「明治学院共通科目」の外国語科目は、外国の人々と交流・協働するときに必要なコミュニケーション・ツールとしての「音」と、その言語の文化的・歴史的背景を重視した教育を行っています。さまざまな異文化を内在的に理解するために、英語以外の外国語（フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語、ロシア語、韓国語）を学修することができます。また、タイ語、アラビア語などの言語や、これらの言語圏の文化理解を深める関連科目も開講しています。

諸領域科目

諸領域科目では、各学問領域にかかわる専門的知見の教授を通して、みなさんが問題を的確に理解するための読解力や分析力、さらに問題解決のための多面的な思考力を身につけることができるようにカリキュラムを整備しています。また、世界に生起する諸問題を実際に目の当たりにし、体験すること・考えることも大学での学修には大変重要です。そのために、ボランティア科目、実習科目、実験科目が多数開講されているのも、「明治学院共通科目」の大きな特色です。

＞Ⅲ．ⅰ．必修科目「キリスト教の基礎A・B」について ・・・・・P.07
＞Ⅲ．ⅱ．必修科目「コンピュータリテラシー」について・・・・・P.13

必修科目「キリスト教の基礎 A・B」の履修について

「キリスト教の基礎A・B」の履修について

みなさんが明治学院大学に入学されると、全学必修科目として、「C1011キリスト教の基礎A」（春学期）と、「C1012キリスト教の基礎B」（秋学期）という「キリスト教学」の基礎科目を学ぶことになります。以下、「キリスト教の基礎A・B」を中心に、明治学院大学の「キリスト教学」科目について紹介し、また、その履修方法について説明します。

1.大学の「キリスト教学」は伝道や布教が目的ではありません

キリスト教系の学校に学んだみなさんは、「聖書」の時間や、礼拝などを通してキリスト教について学んできていますから、キリスト教の授業に対する抵抗感はあまりないかもしれません。しかし、国公立の学校や、キリスト教系以外の私立学校出身者のみなさんの中には、キリスト教に限らず、宗教の授業は初めて、という人も多いと思います。多少不安に思っているという人もいるかもしれません。

大学で教授する「キリスト教学」の授業というのは、みなさんをクリスチャンにするために伝道したり、布教することを第一の目的としているわけではありません。大学で大事なのは、どの人にも共通する普遍的な理性の働きと、批判的な精神の活動です。わたしたちは、キリスト教の授業においても、それらが最大限に尊重されなければならないと考えています。広い視野を持った、オープンな真理探求の姿勢を大事にしたいと思います。

ちなみに、現在、世界のキリスト教人口は、全人口約70数億人の33%、20数億人を超えると言われています。世界の３人に１人がクリスチャンということになります。ユダヤ教とイスラームを合わせた「一神教」の割合は、世界の人口の半数を超えます。日本の中にいるとなかなか実感ができませんが、過去から現在まで、世界でキリスト教が果たしてきた、そして、いまも果たしている役割は、プラス面もマイナス面も含めて、この人口比を遙かに上回るものがあると言っていいでしょう。よいことであれ悪いことであれ、キリスト教についての知識なしに世界を理解することは不可能であると言えます。

しかし、単なる過去の歴史としてのキリスト教ではなく、現在も生きている宗教としてのキリスト教について学ぶことのできる大学は、決して多くありません。明治学院大学はその数少ない大学の一つです。明治学院大学に入学されたみなさんは、この貴重なチャンスを是非活かして、キリスト教科目に積極的に取り組んでみてください。

2.「キリスト教の基礎A・B」はなぜ必修なのですか？

わたしたちはこの問いをよく聞かれます。ここでは主な理由のうち三つだけを挙げておきましょう。

一つは、「キリスト教に基づく人格教育」を行うことが明治学院のそもそもの建学の目的であり、それがすべての基盤となることです。「キリスト教の基礎A・B」という科目は、この「キリスト教に基づく」の「キリスト教」とは何かを批判的に検証し、教授する、いわば明治学院大学の最も根底をなす科目です。自分の大学がどこに立っているか、どのような理想を持ち、どう歩んできたのか。その根底をなすキリスト教の精神とは何かを、本学の入学者には、全員に等しく知ってもらいたい。これがこの科目を必修とす

白金チャペル

る第一の理由です。

明治学院大学は、ヘボン博士をはじめ、幕末から明治時代にかけて来日した多くの宣教師たちの熱心な祈りと、努力によってその礎が作られました。宣教師たちは、日本人と日本の将来のために、キリスト教の精神を根本に据えた高等教育機関で、神に仕え、人と世界に貢献できる人間を育ててゆくことが重要であると考えたのです。一人でも学生がいれば、その一人が人として育つために、彼らは時間と労力を惜しみませんでした。

この建学の精神は、明治学院創立以来、今日まで一貫して保たれてきた本学の良き伝統です。大学の姿は時代の変化と必要に応じて変わります。しかし、大学には一貫して変わらないものがあります。その変わらないもののひとつが、建学の理念であるキリスト教です。その伝統と歴史をみなさん全員に受け継いでいってもらいたいとわたしたちは願っています。

二つ目の理由は、大学における学問の営み自体が、そもそもキリスト教との深い関わりを根底に持っていることです。それが西洋起源の学問である場合には特にそう言えます。各専門分野の成り立ちや関心、発想の仕方、モチーフを根底まで掘り下げていくと、わたしたちは各学問の共通の基盤となっているキリスト教と出会います。どの学問分野であれ、自分の分野がキリスト教とどのような関わりがあるかを明らかにすることは、それ自体がキリスト教主義大学の重要な知的課題でもあります。

三つ目の理由は、キリスト教の教える真理が、人が人として生きてゆく上で決定的に重要であることです。人間は知的な生き物ですから、自分を取り巻く環境世界を知り、それを造り変えてゆきます。大学は、そのために知識、情報、知恵を蓄積し、探求します。知識も、情報も、知恵も力となり、人間と社会、自然環境に多大な影響を与えてゆきます。

しかし、例えば、人間による自然環境の破壊は、現在、取り返しがつかないところまで来てしまいました。わたしたちは、わたしたち自身が獲得し、行使する知識や、情報、知恵に対して、それが本当に人間を幸福にするものなのかどうかという区別がなかなかつきません。しかし、わたしたちは、「それには本当に隣人に対する愛があるか」という問いをクロスさせてみるとき、はじめてその知識、情報、知恵が人を活かすものなのか、そうでないかが、おぼろげながらわかってくるという経験をします。

人間にとって、根源的な問いを繰り返し新たに問われることは、たいへん重要なのです。たとえば、新約聖書は次のような言葉でわたしたちに問いかけます。

> たといわたしが、人々の言葉や天使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘やさわがしい鐃鉢（にょうはち）と同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。（コリント人への第一の手紙第13章１～３節）

大学は高度に知的な場です。しかし、そこで生み出されるこの世の知識、情報、知恵を相対化できなければ、わたしたちは、自分たちが本当に歩むべき道を見いだすことはできません。しばしば、人は外から呼びかけられて、はじめてわれに返るという経験をします。外からの呼びかけに耳を傾ける契機があるかないかは、大学のような高度に知的な場にとってはきわめて重要なのです。キリスト教はわたしたちにとって、そのような外からの呼びかけと言えるでしょう。

今後大学でどのような学問分野を専攻するにせよ、わたしたちは、まず「キリスト教の基礎A・B」を通して、みなさんにこのような外から自分を相対化するための視点、社会や国家やこの世的で完結するものの見方を超えた、垂直的な視点の重要性を学んでほしいと願っています。これがこの科目を本学が必修としている三つ目の理由です。

3.「キリスト教の基礎A・B」について

キリスト教の世界は非常に幅が広く、多様な内容を持っています。「キリスト教の基礎」は、毎年35〜40ぐらいのクラスが開講されますが、担当教員は、それぞれ自分の専門分野（旧約聖書学、新約聖書学、教父学、教義学、教会史、キリスト教史、キリスト教倫理、キリスト教福祉、等々）を生かしながら、一年間の講義計画を立てています。各授業の具体的な内容は、シラバスで確かめてください。ここでは手始めにキリスト教を聖書、歴史、思想の三つの観点から簡単に説明しておきましょう。

（A）聖　書

聖書はキリスト教信仰の土台であり、世界を変えた「書物の中の書物」（The Book of Books）であると言われます。世界には約7,000の言語があるといわれていますが、今日聖書は部分訳も含めるとそのうちの3,300もの言語に翻訳されています。

キリスト教が成立した背景には、それ以前の千数百年に亘るイスラエル民族の歴史が存在しました。旧約聖書は、そのイスラエル民族の歴史と信仰の闘いの記録であり、「創世記」から「マラキ書」まで、全39巻の書物から成っています。それらを研究するのが旧約聖書学です。それに対して、27巻から成る新約聖書には、イエス・キリストの生涯を記した福音書と、最初期のキリスト教徒たちの行動の記録、手紙、そして「黙示録」が収められています。これらを扱うのが新約聖書学です。

聖書を重点的に扱うクラスでは、実際に聖書を読み、表現の特質を押さえながら、旧約聖書の世界・新約聖書の世界に直接わけ入って、そこから、旧約時代の人々の歴史と信仰、イエスと新約時代の人々の信仰について、すなわち、キリスト教信仰の基本中の基本について、理解と考察を深めてゆきます。

（B）歴　史

キリスト教は歴史的な宗教であるといわれます。新約聖書以後のキリスト教の歴史は、パレスチナの片田舎から、地中海を取り囲む古代ローマ帝国全体に広がり、中世には西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、ロシアへと引き継がれ、16世紀の宗教改革と対抗改革を経て、西欧列国による植民地化政策とともに、中南米、アフリカ、アジアへと世界中に拡大してゆきました。キリスト教は西洋の宗教という先入観が日本では強

く見られますが、クリスチャン人口の多さと活発さから見ると、現代のキリスト教の中心地は、むしろアジア・アフリカ・中南米の方だと言えなくもありません。韓国、フィリピン、インドネシアなどのクリスチャン人口は日本とは比べものにならないくらい大きく、活発です。中国のクリスチャン人口も数千万人の単位で爆発的に伸びています。キリスト教は2000年を超える歴史を、常に時代の“いま”を生きる宗教として歩んできました。歴史にウェイトを置くクラスでは、このようなキリスト教の歴史と、歴史の中に神の働きの真実を見る信仰の在り方とを、各時代の出来事に即しながら振り返り、過去と現在、神と人間との対話を深めてゆきます。

(C) 思　想

アウグスティヌスや、トマス・アクィナス、ルター、カルヴァン、ミルトン、キルケゴール、ドストエフスキー、シュライエルマッハー、カール・バルト、ボンヘッファー、キング牧師、内村鑑三、賀川豊彦など、キリスト教の神学者、思想家、社会活動家、文学者、画家、音楽家を挙げれば切りがありません。思想を重点的に扱うクラスでは、彼らの偉大な遺産を通して、神・創造・契約・律法・十字架・復活・福音・救済・終末といった、キリスト教の中心的な教理、神観、人間観、世界観、ものの見方や考え方、そして、それが現代のわたしたちに対して持っている意味を考察してゆきます。現在の緊急課題である、世界的な貧困格差の問題、地域紛争の問題、生殖医療や生命倫理、あるいは環境倫理に対するキリスト教の立場とそれをめぐる議論、キリスト教と社会との関わり、キリスト教と文化との関わりなど、担当教員の専門に即して、多様なトピックが扱われています。信仰を持って生きる人間とその思想について、議論を深めてゆきます。

4.「キリスト教の基礎A・B」の履修について

（1）「キリスト教の基礎A・B」は、横浜校地の月曜日から金曜日の1～2時限目に（水曜日は3時限目もあり）、それぞれ内容の異なる授業が、毎時限2～5クラス開講されます。春学期のクラスは事前に指定されていますので、各自どの教員の授業を受講するのか、シラバスを読み確認してください。秋学期の授業は、希望者に限り春学期と異なるクラスを履修することができます。

（2）「C1011キリスト教の基礎A」（春学期）と「C1012キリスト教の基礎B」（秋学期）は、形式上、それぞれ2単位の別の科目です。特別な事情がある場合を除いて、学期の途中で他のクラスに変更したり、登録された曜時限と異なるクラスに出席して単位を取得することはできません。秋学期に履修クラスを変更する場合は、手続きが必要になりますので入学後に明治学

横浜チャペル

院共通科目ガイダンスの説明を確認して下さい。変更を希望しない場合は手続き不要です。

5.「キリスト教の基礎A・B」以外にもキリスト教関連科目がたくさんあります

「キリスト教の基礎A・B」は、明治学院大学の「キリスト教学」の中の、いわば第１ステージに当たる科目です。明治学院共通科目には、第２ステージとして、以下のような科目も用意されています。

■「キリスト教の諸相１～８」と宗教史１～８

各地域のキリスト教の歴史や、キリスト教思想、キリスト教文化などをテーマとする授業が展開されます。聖書研究、キリスト教の死生観、キリスト教と西洋文化、ユダヤ教史、東アジアキリスト教史のほか、人権や差別、環境等、現代社会の諸問題をキリスト教の観点から扱う科目も用意されています。

■「オルガン実習」

キリスト教の実践的な側面に重点を置いた宗教部提供科目です。キリスト教が生み出した音楽芸術の豊かさを、オルガン実習を通して実践的に学びます。レッスンの詳細については各校地の宗教部事務室までお問い合わせください。

■「明治学院研究１～３」

本学キリスト教研究所提供科目です。「明治学院研究１」（明治学院150年史）はチェーン・レクチャー（複数の教授陣による連続講義）で、ヘボン塾開設に始まる明治学院の150年にわたる歴史を、明治、大正から戦時下を経て戦後に至る日本の歴史と重ね合わせながら考察してゆきます。「明治学院研究２」（宣教師と明治学院）では、ヘボンをはじめとする宣教師たちが明学の創設と教育にどのようにかかわったのかを学ぶことができます。「明治学院研究３」（東アジアから見る明治学院の歩み）、は、東アジア全体の中に明治学院を位置づけ、その歴史を大きな視点で捉えなおそうとする講義です。自分の母校をよく知るためにも、在学中にぜひ履修したい科目の一つです。

これ以外にも、各学部の学科科目の中に「キリスト教と経済」、「英語聖書」、「キリスト教美術」のようなキリスト教関連科目が開講されています。

「キリスト教の基礎A・B」以外の科目はすべて選択科目です。２年次以降も、キリスト教の多様で豊かな世界に対する関心を広げ、自由な選択の中で学びを深めていってほしいと願っています。

必修科目「コンピュータリテラシー」の履修について

「コンピュータリテラシー」のすすめ（履修登録する前に必読！）

【コンピュータリテラシーとは】

現代社会では、コンピュータやインターネットを含むＩＴ（Information Technology：情報技術）があらゆる分野の基本技術として普及し、学校でも、職場でも、そして家庭でも、ますます重要性が高まっています。コンピュータは日本語では電子計算機と訳されるように、もともとは（たった50年ほど前のお話ですが）複雑な計算をするために開発された道具です。しかしながら、インターネットに代表されるネットワーク技術の発達で、コミュニケーションにも欠かせない道具となっています。明治学院大学での「コンピュータリテラシー」科目群は、ＩＴ社会を生きるのに必要な知識と技術を習得することを目標とした科目群です。コンピュータ実習室で、学生一人一人がパソコンやいろいろなソフトウェアを実際に使いながら授業を行い、ＩＴに関する基礎知識と情報処理の考え方を学んでいただきます。コンピュータを使用するというと、難しいと考える学生諸君も少なくはないと思いますが、数学などの予備知識はまったく必要なく、パソコン利用経験がない学生から、経験豊富な学生まで、いろいろなレベル（スキル）に対応した授業が用意されていますので、自分に合った授業を選んで、積極的に学んで下さい。

【コンピュータリテラシーの授業内容】

１年生で履修可能な「コンピュータリテラシー」科目群には、次の３種類の科目が用意されています。

（1）コンピュータリテラシー 1

パソコン初心者向けの情報処理入門の授業です。パソコンの基本操作方法、英文や日本語の文章入力方法、インターネットの使い方、電子メールの使い方、レポート作成に必要なワープロソフト（Word）の使い方などを学びます。パソコン利用経験がほとんどない学生、パソコンを使用した情報処理の方法を系統的に学んだことのない学生諸君には、この科目の履修をお勧めします。半年間完結型の授業になっており、取得単位は２単位です。

（2）コンピュータリテラシー 2

パソコンを使用した情報処理の方法には代表的なアプリケーションプログラムが２つあります。１つは、コンピュータリテラシー１で習得する文章作成（例えば、Word）と、もう１つが、表計算ソフトです。コンピュータリテラシー２は、その表計算ソフト（Excel）の使い方を学ぶ情報処理初級の授業です。表計算ソフトとは、データを表形式で入力して計算処理する機能を持ったアプリケーションプログラムで、ビジネスの場で最もよく使われているアプリケーションプログラムの１つです。実用的なものであると同時に、計算式や関数などを用いてデータを計算処理することを通じて情報処理の基本的な考え方を学ぶことができます。既にワープロソフトが使えるくらいのレベルの人には、この科目の履修をお勧めします。半年間完結型の授業になっており、取得単位は２単位です。

（3）コンピュータリテラシー研究 1A・1B

アプリケーションプログラム自体の基本的仕組みを学ぶための情報処理中級の授業です。プログラムとは、コンピュータに一連の情報処理作業を行わせるための命令の手順書ですが、人間の言語と異なり、プログラム言語というものを用いて書かれた極めて論理的なものです。プログラムの基本的な構造は、難しいものではなく、たったの５つの構造しかありません。本科目では、プログラミング経験がない人を対象に、その５つの基本的なプログラムの構造を初歩から学習します。プログラミング（プログラムを書くこと）を通じて情報処理の考え方をより深く学ぶことができます。本格的に情報処理を学びたい人には、是非、この科目の履修をお勧めします。なお、本科目は、原則的に、春学期・秋学期を連続して学ぶ通年科目になっており、取得単位は春学期２単位、秋学期２単位の合計４単位になります。

【コンピュータリテラシーの位置付け】

明治学院大学の「コンピュータリテラシー」科目群は、２単位必修、つまり、卒業するためには必ず最低１科目は履修し、２単位以上の単位を取らなければならないという位置付けになっています。もちろん、それより多く履修することもできます。例えば、１年生で「コンピュータリテラシー２」を履修し、２年生で「コンピュータリテラシー研究１A・１B」を履修することも可能ですし、４年次までに、３科目全てを履修することも可能です。ただし、「コンピュータリテラシー」科目群では、１年次に履修できるのは「コンピュータリテラシー１」、「コンピュータリテラシー２」、「コンピュータリテラシー研究１A・１B」のいずれかです。例えば、「コンピュータリテラシー２」と「コンピュータリテラシー研究１A・１B」の両方を履修したい場合、１年生で「コンピュータリテラシー２」、２年生で「コンピュータリテラシー研究１A・１B」というように、２年間に分けて履修する必要があります。

【コンピュータリテラシーの履修方法】

「コンピュータリテラシー研究１A・１B」は開講されている曜日・時限の中から履修するクラスを選択することができます。「コンピュータリテラシー１」と「コンピュータリテラシー２」は学科ごとに割り当てられた曜日・時限で履修することが定められています。コンピュータ実習室のパソコン台数に限りがあるため、１クラスあたりの定員は30名余りです。まず、履修したいクラスに希望順位を付けて事前に申し込み、希望者が多いクラスは履修許可者が抽選で決定されます。

大学生活は、４年間と限られています。長いようで、短い４年間ですので、自分のスキルにあったコンピュータリテラシー科目を履修して、大学生活、それから大学を卒業してからの生活にコンピュータを用いた情報処理の方法を役立ててください。

※「コンピュータリテラシー１」「コンピュータリテラシー２」「コンピュータリテラシー研究１A・１B」の違いと授業内容については、シラバスで確認してください（シラバスの参照方法についてはp.18を参照）。

必修科目
「コンピュータリテラシー」
登録申込について

「コンピュータリテラシー」の登録申込について

UCAROによる入学手続きの中に「事前登録科目選択」の欄がありますので、希望する「コンピュータリテラシー」の科目を選択してください。

コンピュータリテラシー
・コンピュータリテラシー１
・コンピュータリテラシー２
・コンピュータリテラシー研究１Ａ・１Ｂ

授業内容を詳しく知るには？

明治学院大学ホームページの「授業概要（シラバス）」で詳しく知ることができます。
　トップページ ▶「在学生の方」▶「授業概要（シラバス）」
検索画面が開きますので「**検索ワード**（教員氏名やキーワード）」を入力してみましょう。
各授業の詳細を知ることができますので、ぜひアクセスしてみましょう。
※掲載内容は2020年度の内容です。入学時には内容が変更になっているものもあります。

問い合わせ先

●横浜教務課　045-863-2025　kyomuy@mguad.meijigakuin.ac.jp
●受付時間　月～金　9時30分～11時45分/12時30分～16時30分
　　土　9時30分～12時00分　日曜祝日はお休みです。

重要：事前登録科目の締め切り後の変更はできませんので、ご注意ください。

選択科目の紹介

「明治学院共通科目」（諸領域科目）　その選択科目の特徴と紹介

C群科目（必修および選択必修科目）

必修科目である「キリスト教基本科目」・「情報処理基本科目」が開講されています。

D群科目（分野別の基礎的講義科目：自由選択）

幅広い学問分野における基礎的知識と正確な判断力を涵養するため、「人文科学系科目」・「社会科学系科目」・「自然科学系科目」・「健康・スポーツ科学系科目」・「総合教育系科目」の各分野・領域において諸科目が開講されています。

E群科目（実験・実習・演習的科目：自由選択）

情報処理能力、科学的思考力、身体に関わる知識・能力、市民社会への参加、論文書法能力について、それぞれより発展的かつ実践的に学修するために、「コンピュータリテラシー研究」・「自然科学（物理学・化学・生物学）方法論」・「シーズンスポーツ研究」・「ボランティア特別研究・実習」・「アカデミックリテラシー研究」等が開講されています。

H群科目（発展的科目）

応用・発展的段階として、各自の関心あるテーマに基づき文献検索や調査・実験等を行いながら問題解決に必要な総合的能力とプレゼンテーション能力の向上を目指して、「アジア・日本研究」・「ヨーロッパ文化圏研究」・「現代科学研究」が３年次生以上に開講されています。

I群科目（英語で学ぶ科目）

幅広い教養に基づいて、様々な文化的背景をもった人と相互に交流するとともに、自他の文化についての相対的な視点を獲得することを目指して、交換留学生とともに英語で学修する科目で、１年次から履修ができます。

明治学院共通科目　諸領域科目表

		1年次生～	2年次生～	3年次生～
C群	キリスト教基本科目	キリスト教の基礎A・B		
	情報処理基本科目	コンピュータリテラシー1～2		
D群	人文科学系科目	キリスト教の諸相1～8 宗教史1～8（1、2、5、6は休講） 哲学1～6 論理学1～6 倫理学1～6 日本文学1～8（3、4は休講） 日本文化論1～8（5、6は休講） ヨーロッパ言語圏の文化入門1～6 アジア言語圏の文化入門1～4 ヨーロッパ言語圏の文化各論1～6 アジア言語圏の文化各論1～4 心理学1～8（5、6は休講） 芸術学1～6 教育学1～2		
	社会科学系科目	政治学1～2 社会学1～8 社会福祉学1～2 経済学1～2 統計学1～4 歴史学1～8 地理学1～6 文化人類学1～2 社会科学概論1～4		
	自然科学系科目	数学1～6 物理学1～6 化学1～5 生物学1～7（2は休講） 情報科学1～4		
	健康・スポーツ科学系科目	健康科学1～2 スポーツ科学1～2 スポーツ方法学1～4		
	総合教育系科目	現代世界と人間1～7（4は休講） 明治学院研究1～3 現代平和研究1～3 環境学1～6 ボランティア学1～8 ライフデザイン講座1	オルガン実習1～2 キャリアデザイン1 ライフデザイン講座2	ライフデザイン講座3～4
E群	自然科学関連科目	物理学方法論A・B 化学方法論A・B 生物学方法論A・B		
	情報処理関連科目	コンピュータリテラシー研究1A・1B コンピュータリテラシー研究2A・2B		
	健康・スポーツ科学関連科目	シーズンスポーツ研究1A・1B シーズンスポーツ研究2A・2B シーズンスポーツ研究3A・3B		
	総合教育関連科目	ボランティア特別研究101 アカデミックリテラシー研究1～2 異文化コミュニケーション研究A・B	ボランティア特別研究102 ボランティア実習101	
	特別学科科目	社会学概論A・B		
	海外インターンシップ関連科目	海外インターンシップ課題研究A・B 海外インターンシップA・B		
	留学生関連科目	日本の社会と文化1A・1B 日本の社会と文化2A・2B 日本の社会と文化3A・3B		
H群	発展的科目			アジア・日本研究A・B 現代科学研究A・B
I群	英語で学ぶ科目	Japanese Arts and Culture 1～6 Japanese History 1～6（3、4は休講） Japanese Society 1～6 Multilingualism and Multiculturalism 1～4 Current Issues 1～4		

※各科目の学修の目標、講義要項、講義計画、成績評価の基準等は、本学のホームページ（https：//kyomu.meijigakuin.ac.jp/kyomu/UnSSOLoginControlFree）より確認できます。

アカデミックリテラシー研究1

「情緒作文」を捨て、論理的な説得の世界へ

日本の高校までの一般的な作文教育と、大学で求められる「書く技法」の決定的な違いとは何でしょうか。自分の体験による「素直」な感想をのべ、「○○すべきです」と主観的に言い立ててほめられることは、大学ではありえません。必要なのは、客観的な根拠にもとづいて「だれが考えてもこうならざるを得ない」と主張する、論理的な文章です。そのためには、他者の主張を批判的に検証する「読む技法」を身につけることも欠かせません。レポートや論文に求められる学問的な「読み書きの技法」、すなわちアカデミックリテラシーを早期に修得し、能動的な知の世界の入口をくぐりましょう。身につけた技法は大学生活のみならず、広く社会生活を根幹で支える力となるはずです。

●科目のあらまし

「アカデミックリテラシー研究１」は、大学での日本語によるレポートや論文の執筆に必要な基本的技術を身につけるための、一年生向け、一学期完結の少人数・演習型コースです。この授業の特色は、論理的な文章を書くさいに必要な具体的スキル――問いをどのように立てるか、資料をどのように検索するか、ひとから借りたことばやアイディアを自分のものとどのように区別するか、段落をどのように構成するか、どのように推敲して無駄のない文章にするか――を体験的に学べることです。指導の中心は、ほぼ毎週宿題に出されるレポートの執筆と、教員による添削指導です。

こうしたスキルを一年次に学ぶことにより、レポートがかなりラクに書けるようになり、大学の講義の理解も格段に深まるでしょう。しかしそれだけではありません。論文執筆で体験する思考のプロセスは、見つけにくい問題の発見に役だち、まちがった推論を取りのぞき、あなたの主張を説得力あるものにします。このためレポートを書く技術は、日常生活のさまざまな場面にも活きるのです。とは言えスポーツや芸術の修練と同じように、書き方を学ぶうえでも、基本的な“型”すら身につけず、いきなり自分のやりたいようにやるのは理にかないません。この授業では、全クラス共通の配付資料にもとづき、履修者のすべてが同じ課題にとりくみ、基本的な“型”に即したレポートを書きます（2020年度は「死刑存廃問題」をテーマとしました）。自分なりのテーマを書きたいように書くのは、その先のことです。

この科目の履修者はほぼ例外なく、一年目でもっとも苦労の大きな授業であると感じるはずです。一度欠席すると、追いつくのもかなり大変です。過去の履修者も相当の覚悟をもって登録したはずですが、残念ながらおよそ２割が単位取得にいたりません。ひとに読ませるに値する文章を一学期間書き続ける、ねばりづよい意志が欠かせません。ただしそうした意志さえあれば、履修者一人ひとりが別次元の書き手に成長します。独自の教科書を用い、定員15名ほどの

クラスで、明快かつ丁寧な指導をします。

●授業のゴール

学問的な文章を書くうえでもっとも重要なのは、はっきりした問いを立てたうえで、“論拠”を示しながらその答えを出すことです。この問い、論拠、答えの三点セットを、「論証argumentation」と呼び、その有無が論文とただの随想や読書ノートとの決定的な違いです。この科目ではとくに、刊行された資料や調査データを根拠として、何らかのアイディアを論証する技術を学びます。
とくに重視する基礎的なスキルはつぎの４つです。

1　簡潔な主張をもつ段落を単位として論文を構成する方法（paragraph writing）
2　先行する資料を公正かつ効果的に示す、典拠資料の表示や引用など「帰責attribution」の作法
3　自分の文章を批判的に手直しし、無駄なく読みやすい表現にする推敲の方法
4　さまざまなデータベースをもちいた資料検索の方法

これらのうちより本質的であるとともに、多くの受講者が苦しむのが「１」と「２」です。「１」のパラグラフ・ライティングは、日本ではまだ一般化していませんが、英語圏では論文書法の基本とされ、初心者にただちに役立つ論理構成のスキルです。「２」の引用や典拠表示の作法は、他人の表現やアイディアを公正に示すための約束ごとです。このルールを身につけずにレポートを書くと、他人の文章を自分の名前で発表したり（剽窃）、他人が言っていないことを言ったかのように示したり（捏造）することになり、不正行為として処分の対象ともされます。しばしば文章の上手下手ではすまされない、人間性の問題とみなされるため、厳しく指導します。

こうしたスキルの定着に特化した独自教科書『アカデミック・ライティング・ハンドブック』を用い、論述の形式（どのように論じるか）に関するかぎり、この科目の履修後、大学卒業者（学士）として最低限恥ずかしくないレベルに達することを目ざします。

●レポート課題

こうした技術を体験的に身につけるため、受講後４日ほどでレポートを１本提出し、翌週の授業で担当教員の添削を受け取ります。このうち作業量が大きいレポートを学期中盤に１～２回（1,600字程度）、期末に１回（4,000字程度）課します。成績評価上の比重も大きいこれらのレポートの執筆中には、個別面談を受けます。また学期中盤のレポートでは、担当教員による添削を受けたうえで再提出する機会がありま

す。再提出のさい自分の文章を批判的に読みなおすことにより、叙述や論理構成の欠陥や基本的なスキルの不足に気づき、ひとりで推敲する力が身につきます。これら以外の提出物は、平常点の範囲で評価します。

●教室での活動

レポートを書く学生の多くが、どのように課題に答えるか以上に悩むのが、まず何を問うかです。この授業では、ペアやグループでのディスカッションなどの協同作業のなかで資料を消化し、背景情報を整理することにより、問いの立て方を学べるよう設計されています。学期のテーマにつき、それぞれ４～５回ほどを、こうしたグループワーク主体の対話型授業とします。教室での活動をとおし、論理的なコミュニケーション能力を育てることも、この授業の重要な目的のひとつです。また段落構成法や引用作法などのスキルについては、教科書をもちいた講義で説明します。一学期15回の授業の構成については、シラバスをご覧ください。

●履修手続き

「アカデミックリテラシー研究１」は、例年希望者が定員を大きく上回るため、「共通科目ガイダンス」当日に事前申込みのうえ、抽選により履修者を決定しています（申込みの時期と方法が変わる場合は事前にアナウンスをします）。事前に時間割をよく確認し、自分の学科の必修科目と重複しない曜時限を完全に把握しておいてください。「アカデミックリテラシー研究１」では、いったん履修登録した学生の自己都合による取り消しは認めません。「とりあえず抽選だけ申込んでみる」「一度授業に出てから考える」というやり方は、制度として許されていないだけでなく、切実に履修を希望しながら抽選に漏れた学生に大きな不利益をもたらします。また履修中に課題提出をあきらめたばあい、成績証明書には「D」と明記されます。授業の内容としくみをよく理解してから申込んでください。

ボランティア市民活動実習プログラム

ボランティアしたい！

ボランティア・市民活動の広がり

現代、経済のグローバル化や、情報テクノロジーの発展によって、世界の距離は急速に縮まり、思い立てば何処にでも出かけること、連絡を取ることができるようになりました。その一方で、貧困の問題は深刻さを増し、地球環境の破壊はとどまることを知りません。今まで人々を包んでいた家族や地域の共同体は解体され、人々は不安のただ中に置き去りにされています。そんな中で、地球のさまざまな場所で、人間の居場所を立て直そうとする動きがはじまっています。ボランティア、市民活動、NPO、NGO、社会的企業という営みは、混迷する世界の中で、他者と共生し、希望を紡ぎ出そうとする人々の願望のあらわれです。

ピースウィンズ（広島）

見沼田んぼ福祉農園（埼玉）

明治学院大学とボランティア

明治学院大学は、全国の大学の中でも、ボランティア実践・市民活動実践のトップランナーだと自負しています。開校当初より、学生たちは貧困地域に生きる人たちや、鉱毒事件の被害者たちに寄りそう活動を展開してきました。ボランティアセンターが全国に先駆けて開設され、東日本大震災・津波では、日本の大学としては一番早く被災地にかけつけ支援しました。多数の学生が参加する「1 Day for Others」（1日ボランティア）も定着し、NPO、NGO、社会的企業で活躍する卒業生も多く輩出しています。そして現役の多くの学生たちも、ボランティア活動を通して自己の生き方を見つめ直す機会を得たり、かけがえのない人たちと出会っています。

口永良部島のへきんこの会（鹿児島）

悠遊ファーム（北海道）

そして、いま、明治学院大学はそんな学生の関心と熱意を授業科目にとりいれることに取り組んでおり、そのひとつがここにお知らせするボランティア市民活動実習プログラムです。授業科目としてのボランティア実習は、夏休みを利用して、国内各地に出かけて行き、様々な市民活動の現場での実習を行います。でも、それだけではありません。せっかくの体験がそれだけで終わらないよう、そしてその体験を大学での学びに結びつけるよう、ボランティアや市民活動の原理を学ぶとともに、教員と相談し、実習団体と交渉しながら、自身の実習計画を立てる科目（ボランティア特別研究101）が春学期からスタートします。秋学期には、教員や他の履修者との議論を通じて、実習の成果を整理・分析し、報告としてまとめるための授業（ボランティア特別研究102）を履修します。

さまざまな他者や、市民活動の現場との出会いの中で、自分の可能性を広げてみたい！　そう思う皆さん、臆することなく手をあげてください。

実習内容は変更もあります。詳しくは、入学後の説明会等でお知らせします。

NPOカタリバ（東京）

「明治学院共通科目」(外国語科目) その選択科目の特徴と紹介

外国語科目は、卒業のためにかならず履修が必要な科目と学生が自ら選択して力を伸ばすための科目に分かれます。

C群科目(必修科目):

英語コミュニケーション１AB、２ABは、カリキュラム留学を含めた４年間の学修に必要な基礎的な英語能力を高めるための授業です。「聞く」「話す」「読む」「書く」の英語４技能のすべてに重点を置き、グローバル法学科の専門外国語科目English for Global Communication １AB、２AB、English for Legal Studies １AB、２AB、３ABを学ぶための土台となるようなオールラウンドな英語力の向上を目指します。(なお、英語以外の外国語（初習語）は自由選択科目として履修することができます。希望者は教務課または教養教育センターに申し出てください。)

E群科目(実験・実習・演習的科目:自由選択):

外国語の力を高めるために、それぞれ学習者の能力や目的に合わせて選択できる外国語科目を開講しています。

英語以外の外国語（初習語）では、１年次から履修できる科目として、会話力等を集中的に高めたいという人のための「特別演習○○語」を開講しています（原則として、C群科目で選択科目として履修する初習語１AB、２ABと同一年次に履修する必要があります)。また、さらに別の言語も学びたいという人のための「○○語の基礎」という科目も開講しています。

２年次以降では、１年次で学んだ外国語科目をさらにステップアップさせるための「○○語研究」が開講されており、学習者それぞれの学習テーマや目標に合わせて学び続けることが可能です。

I群科目(英語で学ぶ科目:自由選択):

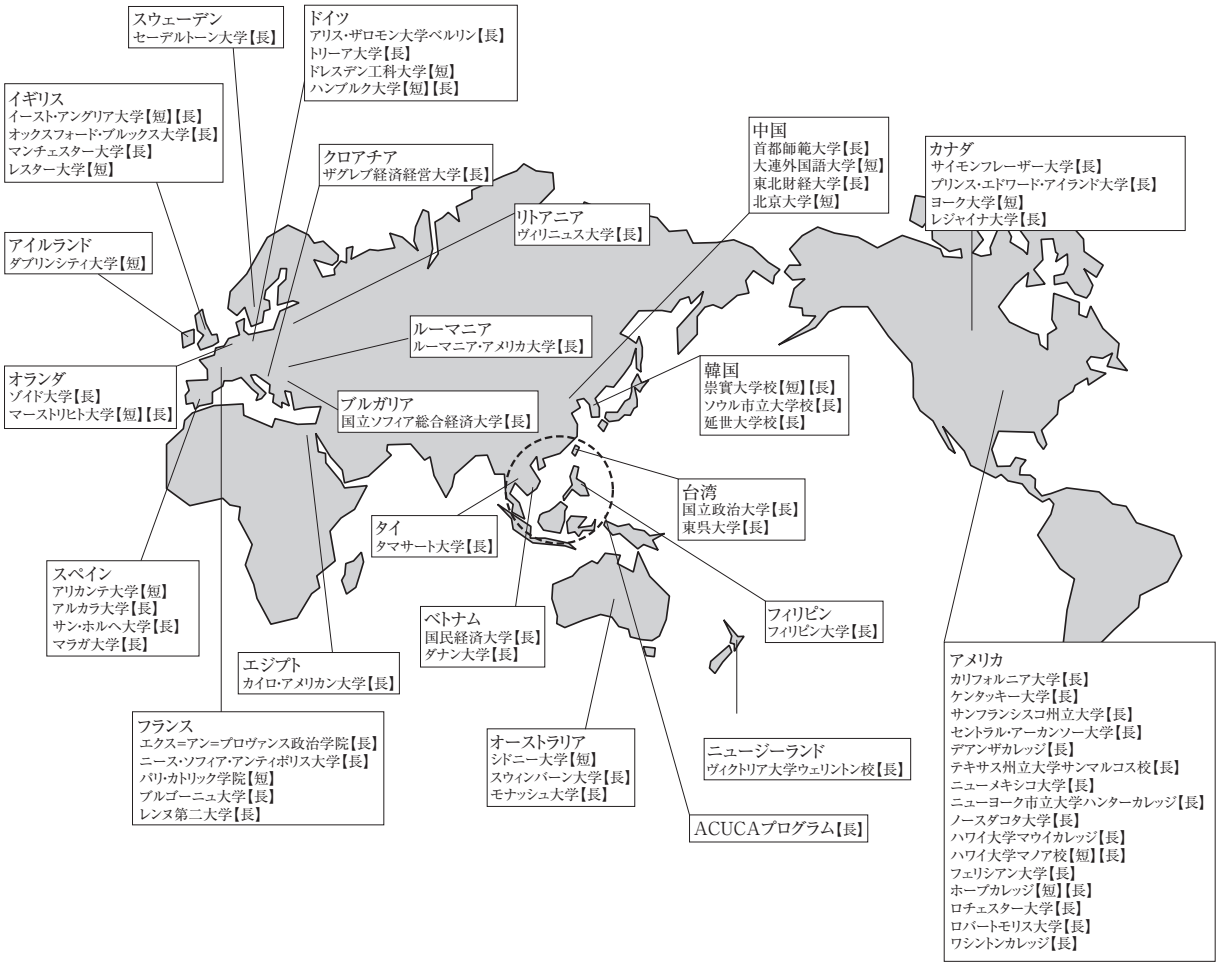
幅広い教養に基づいて、様々な文化的背景をもった人と相互に交流するとともに、自他の文化についての相対的な視点を獲得することを目指して、交換留学生とともに英語で学修する科目で１年次から履修ができます。

明治学院共通科目　外国語科目表

		1年次生～	2年次生～	3年次生～
C群	英語	英語コミュニケーション１A・１B※ 英語コミュニケーション２A・２B※		
	フランス語	フランス語１A・１B フランス語２A・２B		
	中国語	中国語１A・１B 中国語２A・２B		
	ドイツ語	ドイツ語１A・１B ドイツ語２A・２B		
	スペイン語	スペイン語１A・１B スペイン語２A・２B		
	ロシア語	ロシア語１A・１B ロシア語２A・２B		
	韓国語	韓国語１A・１B 韓国語２A・２B		
E群	英語	英語特別研究101～102	英語研究１A 英語研究２A	英語研究３A・３B
	フランス語	特別演習フランス語A・B	フランス語研究１A フランス語研究２A	フランス語研究３A・３B
	中国語	特別演習中国語A・B	中国語研究１A 中国語研究２A	中国語研究３A・３B
	ドイツ語	特別演習ドイツ語A・B	ドイツ語研究１A ドイツ語研究２A	ドイツ語研究３A・３B
	スペイン語	特別演習スペイン語A・B	スペイン語研究１A スペイン語研究２A	スペイン語研究３A・３B
	ロシア語		ロシア語研究１A ロシア語研究２A	ロシア語研究３A・３B
	韓国語	特別演習韓国語A・B	韓国語研究１A 韓国語研究２A	韓国語研究３A・３B
	西洋古典研究	ギリシャ語研究A・B ラテン語研究A・B		
	言語の基礎	アラビア語の基礎A・B タイ語の基礎A・B		
	短期留学認定科目	イギリス研究、アメリカ研究、オセアニア研究、ヨーロッパ研究 フランス研究、ドイツ研究、スペイン研究、東南アジア研究、韓国研究、中国研究、カナダ研究		
I群	英語で学ぶ科目	Japanese arts and culture 1 ～ 6 Japanese history 1 ～ 6（3、4 は休講） Japanese society 1 ～ 6 Multilingualism and multiculturalism 1 ～ 4 Current issues 1 ～ 4		

※必修科目です。
各科目の学修の目標、講義要項、講義計画、成績評価の基準等は、本学のホームページ（https：//kyomu.meijigakuin.ac.jp/kyomu/UnSSOLoginControlFree）より確認できます。

留学プログラムの紹介



2020年10月現在

留学したい！

大学に入ったら留学したい！そう思っている方も多いと思います。明治学院大学ではそんな皆さんの希望に応えようと、豊富な留学プログラムを用意しています（詳しくは本学ホームページの「留学・国際交流」で確認してください）。長期留学は約１年にわたって海外の大学で学部生として学んだり、インターンシップなどを行います。短期留学は夏・春の休暇期間を利用しての外国語研修が主たる内容で、明治学院共通科目として単位認定されます。長期であれ、短期であれ、あなたの世界を広げる大きなチャンスです。

でも、その前に…外国語はだいじょうぶですか？留学は海外旅行ではなく、なんの準備もなく行けるわけではありません。せっかくの留学なのに、話しかけられてもモジモジしているばかりで、宿舎にとじこもっていたり、日本人グループでかたまっているだけでは折角のチャンスを逃してしまうし、相手に対しても失礼というもの。相応の外国語運用能力と留学先の文化に対する理解を蓄積して、留学に臨みたいものです。

夢を実現したいと願い、努力する皆さんを、私たちも全力で支えたいと思っています。

留学プログラムについて、詳しくは、入学後の国際センター（IC）の説明会でお知らせします。

明治学院共通科目ガイドブック

（グローバル法学科用）

編　集　　明治学院大学 教養教育センター

〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518

制　作　　ヨシダ印刷株式会社